

1

目が覚めた。しかし何か違和感を感じる。

「ん……何処だここ？」

見知らぬ天井、上体を起こし寝ぼけ眼を擦りながら辺りを見回す。アパートの一室のような殺風景な部屋。部屋の隅にはベッド、その横に小さなテーブルが置いてあるだけの様だ。

しかし知らない部屋という以上に違和感を感じさせる、この部屋にはドアや窓といった外部とつながる物がないのだ。

「ははーん、夢だな。」

やけにリアルな夢だなと思いつつも横になり目を瞑る。次に目覚めれば文字通り夢も覚めるだろう。

「あ、目え覚めたみたいですね。」

突然の声にハッとして起き上がる。

目の前には幼さの残りつつも整った顔立ちの少年がいた。

「誰だこいつは？さっきまでここには誰もいなかったらとでも言いたそうな顔してますね？」

とキャッキヤと笑っている。

凶星を突かれ動揺しつつも聞き返す。

「誰だお前は？ここは何処だ？」

少年は笑顔のまま返す。

「僕は天使です。ここはそうですねえ審判の部屋とでも言いましょうか。」

「はあーん……で、その天使様が俺に何の用だ？」

笑顔のまま続ける。

「まあ天使って言っても僕等の仕事は亡くなる予定の方や亡くなって彷徨っている魂を神様のところに連れて行くのが主なんですけどねえ。」

「亡くなる予定って…なんか死神みたいだな。」

「まあ似た様なもんですねえ、人間が勝手にそう思ってるだけでこれが天使ですよ。」

いやあ〜と照れた様な仕草で笑っている。

「ん、てことは俺は死んだのか？」

こちらの雰囲気を感じたのか真面目なトーンで答える。

「いや、貴方は死んではないですよ。」

「え？」

「ん？」

「いやいや、これはどういう状況なんだかちゃんと説明してくれよ。」

「じゃあ時間も勿体無いですし進めましょうか。」

こちらの反応を見つつ天使は続けた。

「まず、貴方ここに来る前の事って覚えてないですよねえ？」

「え……いや俺の名前は〇〇だし……ん、あれ？思い出せん。」

「それはそういうもんですから気にしないでください。全部終わればスッキリバッチリ思い出しますから。」

「不思議だな…」

「神の力です。」

それよりこれを見てくださいと促され壁を見ると映像が映っている。

「これも不思議な力か？」

「はい。」

壁には顔に包帯を巻き管を繋がれてベッドに横たわる俺の姿が映っていた。

2

天使の話のを要約するところだ。

どうやら俺は事故にあったらしい、歩道に車が突っ込んできて巻き込まれたんだと。

それはそれで仕方がないがそこからが問題だった。

この事故で一人の人間が死ぬ予定だったが四人の人間が重傷を負いつつ

も一命を取り留めたらしい。

そんな予定外の事態が起きた時の措置だそう。

「一人の人間に誰が死ぬかを決めさせるんです。それが貴方って訳ですよ。」

元々俺はその事故に巻き込まれる予定はなかったらしい。

「第三者の選択っていう教えなんですよ。第三者に選ばせる事によって自分の意思を無くす、その結果こそが偶然による神の意思だっていう。」とかそんなことを言っていた。

先程の壁には三人の姿が映っている。

頭を抱えている者、泣き崩れている者、呆然と目の前の空を見つめている者。三者三様でそれぞれが俺と同じような部屋で過ごしていた。

「一人選べって……どうやって選べばいいんだよ……」

記憶がない俺には当然どの顔もピンと来ない。それも私情を無くす為だそう。

「タイムリミットは約三日、壁に映ってるタイマーが0になるまでに決めてください。それ以上は肉体と魂が離れてるの危険なんですよ、下手すりゃ全員死んじゃいますからねえ。」

「どうしようもねえな。」

「あーあと欲しい物とかあったら言ってくださいねえ。呼ばれれば来ますし出来る限りの物は用意しますから。」

そして笑顔に戻り

「それではよろしくおねがいしますねえ、ばいばーい。」

3

タイムリミットまであと半日。

この三日間三人を見ていたがまだ決めかねている。

まず一人目のAは20代前半くらいの男で初日こそ頭を抱え落ち込んでいたが今はもう平静を取り戻した風だ。

しかし実際は夜も眠れてない様だった。

二人目のB、長い黒髪のお嬢様といった様な可愛らしい娘だ。歳は大学生位だろうか。

初日から泣いていた為に目も腫れぼったくせっかくのかわいい顔が台無しだ。

さすがにもう泣き疲れたのか落ち着いている。

そして三人目のC、呆然としていたが吹っ切れたのか見た目どおりの活発な娘だった様だ。

天使に食べ物を要求してはこっちが引くくらいがつつり食べ、暇をつぶす道具を要求したり天使と楽しそうに雑談をしたりしていた。

「こんなんどうすりゃ良いんだよ……」

こんな短時間で人となりがわかるはずもなく頭を抱える。

そしてタイムリミットが迫るとまたも変化が現れた。

平静を保とうと煙草を要求したAは一服すると覚悟を決めたのか目を瞑り時間が来るのを待っている様だ。

一時は落ち着いていたBは子供のように泣きじゃくりかわいい顔をぐしゃぐしゃにしている。

そしてCはここにきて溜まっていた物が爆発したようで一通りわめき散らすと寝てしまった。不貞寝である。

4

「そろそろ時間ですけど結論は出ましたあ？」

此方の気持ちなどお構いなしにどこか楽しげだ。

「ああ…決めたよ。」

「おお！それは良かった、これで貴方は生きれますね。それで誰に？」
ポンッと手を叩くそぶりを見せ目を輝かせる。

こいつなりに和ませようとしてるのかもだがイラっとするだけだ。

「最後に確認させてくて、終わったらここでのことは全部忘れるんだな？」

一転真面目な顔になり答える。

「ええ、貴方もあの方々も全てきれいに忘れますよ。この部屋の事も私の事もね。」

そしてニコリと笑ったが目は寂しげだ。

「わかったじゃあ決めたよ、——だ。」

「その人にしたんですか、なるほどわかりました。それでは時間もありませんし記憶を戻して魂を帰しましょう。」

「ああ、ってお前これ……うわあああああああああああ！！！」

「それではまた会う日まで。神の御加護があらんことを。ばいばーい！」

5

「あ、〇〇さん気がつきましたか？！貴方三日間も意識がなかったんですよ？」

どうやら俺は事故にあったらしい、歩道に車が突っ込んできて巻き込まれたんだと。

たしかデート中だったんだ……彼女は無事だろうか……？

0

「いや～今回も良かったねえ。」

『いや良かったって……好きなあお前。』

「みんな良い人だったし楽しかったよ？」

『見てたけどさあ、うんまあな。』

「それに最後の記憶戻った瞬間の顔ったらなかったね！いやーまさかだねえ！！！」

『ほんといい性格してるなあお前は。こんなだって知ったらびっくりする

ぞ。』

「人間が勝手にそう思ってるだけでしょ。僕等は天使で彼等にとっては死神さ。」

「あ、また予定外の【事故】だ。いや～まいったなあ。」

『あからさまにウキウキすんなよ。』

あとがき

はいどうもMUTUでした。

某所で言ったんだけど今回のSS企画のテーマが発表された時からダウンタウンの松本人志監督の「しんぼる」って映画がどうも頭から離れなくてね。

内容的には全然違うんだけど影響を受けたっちゃ受けたのかなあ。

まあ密室と天使位しか共通点ないんだけど。

あと第三者の選択ってそんな感じの幽白にあった気がするね、よく覚えてないけど。

そんなこんな。